

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 13 日現在

機関番号：32507

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370226

研究課題名(和文) 芭蕉五十回忌に至る「かるみ」の継承と伝播に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Basho's "Karumi" in its Succession and Propagation from His Death to His 50th Anniversary

研究代表者

佐藤 勝明 (SATO, Katsuaki)

和洋女子大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：60255172

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：芭蕉没後から芭蕉五十回忌である寛保三年(1743)ころまでの期間を対象に、芭蕉の提唱した「かるみ」の継承と伝播の様相を明らかにした。とくに、『伊勢新百韻』『白陀羅尼』『節文集』に収められる連句作品を注釈し、芭蕉の「かるみ」が変容しつつも継承されていることを確認した。また、宝永期後半の俳書を調査し、各書の入集者と入集状況を一覧化すると同時に、各書の位置づけを探り、「宝永正徳俳人大観」として公表した。

研究成果の概要(英文)：We have studied how Basho's "Karumi" (lightness; his poetic ideal) has been succeeded and propagated from his death to his 50th anniversary. By making commentaries of renku (linked verse) in Shiko(Basho's disciple)'s works, Iseshinhyakuin, Hyakudarani, and Setsubunshyu, We concluded that Basho's "Karumi" was passed down the later generations with transformation. We investigated Haiku prose in the later Hiei period and made lists of the authors and entries of all books. In so doing, We delved into the literary position of each book and published the result as an article "Hoeisyoutokuhaijintakan."

研究分野：日本近世文学

キーワード：近世俳諧 かるみ 蕉風 芭蕉没後 地方俳書 継承と伝播

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 18～20 年度に科学研究費を受けて行った研究、『炭俵』『別座敷』の分析による「かるみ」の研究(課題番号: 18520127)と、平成 21 年度～23 年度に科学研究費を受けて行った研究、『続猿蓑』と地方俳書の比較による「かるみ」の研究(課題番号: 21520200)の延長上にあるものであり、これらの成果を十分に活用しつつ、「かるみ」の継承・伝播の問題を考究しようと、計画を立てたものである。以下、3つの点に分けて説明する。

(1) 内容的な面に関しては、『炭俵』『別座敷』『続猿蓑』の連句分析を通じて、芭蕉の「かるみ」の本質をより明らかなものにする事ができた。すなわち、それは、高度な思考活動を行いながらも、その痕跡を句の表面にはほとんど残さないほどの、潔い捨象と推敲によって、簡潔・平明な作品にしていったものだ、ということである。本研究では、芭蕉没後、それはどう継承(あるいは変容)されていったのかを、具体的な作品の注釈を通して、明らかにしていくことになる。その際の方法としては、これまでの研究により、三段階による付合分析の有効性が確認されたので、それをここでも全面的に利用する。

(2) これまでの研究により、できる限り多くの俳諧資料に接することが、いかに大切であるかを痛感させられてきた。そこで、今回の研究では、時期を芭蕉五十回忌ころまでと区切り、数多くの俳書を分析対象として、人的な交流や、「かるみ」が伝播していく様相を探っていくことにした。

(3) これまでの研究では、芭蕉生前の時期を中心に、元禄期の俳書を悉皆的に調査し、入集者と入集状況を一覧化して、『元禄時代俳人大観』全三巻(八木書店、2011 - 2012)にまとめた。この作業を継続することも、本研究の大きな柱の一つとなる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「1. 研究開始当初の背景」にも記した通り、これまでの研究成果を大きく利用しながら、芭蕉没後の「かるみ」のあり方を、作品に即して具体的に探っていくことにある。以下、3つの点に分けて説明したい。

(1) 本研究で何よりも優先すべきは、未注釈の連句作品を対象に、三段階分析の方法(後述)を用いて、注釈を施していくことである。芭蕉晩年の連句作品に見られた付合の手法、すなわち、高度な思考活動を行っているが、句の表面にはその痕跡をほとんど残さず、潔い捨象と推敲によって、簡潔・平明な句にしていくということが、果たして、その後の蕉風作品の中にも継承されているの

かどうか、問われるべき第一のことである。主たる対象としては、支考ら美濃派の作品が有力な候補となる。

(2) 芭蕉没後から、芭蕉五十回忌に当たる寛保三年(1743)ころまでの期間を主たる対象に、できるだけ多くの俳諧資料に接することが、次の大きな目的となる。そのために調査旅行を敢行し、俳諧資料をデジタルカメラで撮影し、書誌的データをまとめた上で、その資料の俳壇史的な位置づけを考えていくことになる。

(3) 『元禄時代俳人大観』全三巻(八木書店、2011 - 2012)の続編として、「宝永正徳俳人大観」を作成することも、もう一つの大きな目的である。これまでの研究で集めた資料や、(2)の調査旅行で集めた資料を有効に使いながら、作業を進めていくことになる。

3. 研究の方法

本研究で用いる方法についても、「2. 研究の目的」に記した3点に分けて記していくことにしたい。

(1) 連句の注釈に関しては、従来、各注釈者が自分のよしとする方法で読解・執筆してきたため、比較しながら考えるのが難しい状況にあった。そこで、研究代表者である佐藤は、次の三段階による分析方法を開発し、『炭俵』『別座敷』『続猿蓑』などの連句作品に新たな注釈を施してきた。本研究でも、これを活用し、美濃派の祖であり、芭蕉の「かるみ」を継承した第一人者と目される、支考が一座した作品を中心に、注釈を進めていく。その分析方法は、

付句の作者は前句をどのように理解し、とくにどの点に着目したか。〔見込〕
その見込の上で、付句にはどのような場面・情景・人物像などを詠もうと考えたか。〔趣向〕
その趣向に従って、具体的にどのような素材・表現を選んで一句にまとめたか。〔句作〕

の三段階で付合を読むというものである。

(2) これまでの研究でも行ってきたように、全国に散在する俳諧資料を探し、実際に手にとって確認しつつ、書誌的事項を記録しながら、デジタルカメラで撮影をする。その上で、各資料が俳諧史的にはどのような位置づけになるかを探り、さらに、人的な交流や「かるみ」伝播の様相などを探っていく。

(3) 『元禄時代俳人大観』全三巻(八木書店、2011 - 2012)で用いた方法は、元禄時代(貞享元年～宝永四年)の俳書を悉皆的に調査し、中に登場する俳人を五十音順に並べ換え、各入集句数や連句への参加状況、書誌的事項などをまとめる、というものであった。

ここでもその方法を踏襲し、宝永五年(1708)以降の俳書を悉皆的に調査して、入集者と入集句数、書誌的事項などをまとめ、それらを一覧化した「宝永正徳俳人大観」を作成する。

4. 研究成果

本研究で得られた成果に関して、上記の3点に即して記していくことにする。

(1) 三段階による分析方法を使い、具体的に支考らの連句作品を読んだものとして、次の3本の論考を発表した。

佐藤勝明・玉城司・伊藤善隆・服部直子・越後敬子・稲葉有祐「『白陀羅尼』「枯たはと」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』87、2014、35-46

佐藤勝明・玉城司・伊藤善隆・服部直子・越後敬子・稲葉有祐「『節文集』「七夕や」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』89、2015、24-35

佐藤勝明「『伊勢新百韻』分析(上)(下)」、『和洋女子大学紀要』55・56、2015・2016、199-210、171-182

これらを通して、支考らの連句作品には、たしかに芭蕉流の「かるみ」が継承されていることが確認された。ただし、前句の見込をしっかりと行った上で、趣向・句作へと進んでいく芭蕉連句の場合に比べると、前句の見定めがおろそかになりがちであり、気分に多くをよった付合が見られる結果となった。この点に、「かるみ」が変容しつつ伝播していく様相の一端を見ることができる。

また、この作業と並行し、支考の俳諧の原点にも位置づけるべき、『続猿蓑』の読解にも力を注ぎ、やはり三段階による分析方法を使って読解し、次の3本の論考を発表した。

佐藤勝明・小林孔「『続猿蓑』「いさみ立」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』85、2013、65-80

佐藤勝明・小林孔「『続猿蓑』「猿蓑に」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』86、2014、46-58

佐藤勝明・小林孔「『続猿蓑』「夏の夜や」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』88、2015、36-52

これらを通して見えてきたのは、芭蕉が一座する歌仙に比べ、芭蕉が一座しない歌仙の場合、やはり、前句の見定めがおろそかになりがちで、気分に頼り、語の縁にすがって付ける傾向が出る、ということである。美濃派の作品に見られる傾向の端緒が、芭蕉生前にも見られるということであり、ここに、「かるみ」の付合がいかに難しいものであるのかも、改めて確認されたのであった。

(2) この研究では、佐賀大学図書館・富山短期大学大西研究室・名古屋市博物館・真田宝物館・敦賀市立博物館・大阪府立大学図書館などを訪問し、それらに所蔵される俳諧資料を閲覧した上で、その多くをデジタルカメ

ラによって撮影した。また、各資料(俳書類)の書誌的事項も記録した。調査旅行後には、それらを点検し、各資料の位置づけを考えながら、人的交流や「かるみ」伝播の様相などを考えた。そのことによる成果は、まだ論考等にまとめるまでには至っていないものの、(1)に掲げた～の各論考の中にも、成果の一分は反映しており、また、(3)に掲げる「宝永正徳俳人大観(一)～(五)」の中にも、成果の一部が使われている。

(3) 『元禄時代俳人大観』全三巻(八木書店、2011-2012)が、元禄時代(貞享元年～宝永四年)の俳書を悉皆的に調査したのを受け、本研究では、宝永五年以降の俳書を悉皆的に調査し、同じ方法で入集者と入集句数、書誌的事項などをまとめて、「宝永正徳俳人大観」を順次作成している。この研究期間に発表したのは、以下の5本である。

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明「宝永正徳俳人大観(一)」、『近世文芸研究と評論』85、2013、185-209

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明「宝永正徳俳人大観(二)」、『近世文芸研究と評論』86、2014、139-162

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明「宝永正徳俳人大観(三)」、『近世文芸研究と評論』87、2014、118-141

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明「宝永正徳俳人大観(四)」、『近世文芸研究と評論』88、2015、132-146

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明「宝永正徳俳人大観(五)」、『近世文芸研究と評論』89、2015、92-111

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計20件)

佐藤勝明、「蕪村連句の傾向 『もゝすもゝ』の分析から」、『文学』17-2、査読無、2016、50-63

佐藤勝明、「『伊勢新百韻』分析(下)」、『和洋女子大学紀要』56、査読有、2016、171-182

佐藤勝明、「『猿蓑』秋発句考(五) 秋の終わり」、『和洋国文研究』51、査読無、2016、23-30

玉城司、「新出芭蕉真蹟資料三点 初期懐紙一点と書簡二点」、『連歌俳諧研究』130、査読有、2016、29-40

佐藤勝明・玉城司・伊藤善隆・服部直子・越後敬子・稲葉有祐「『節文集』「七夕や」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』89、査読有、2015、24-35

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明、「宝永正徳俳人大観(五)」、『近世文芸研究と評論』89、査読有、2015、92-111

佐藤勝明・小林孔、「『続猿蓑』「夏の夜や」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』88、2015、

36-52

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明、「宝永正徳俳人大観（四）」、『近世文芸研究と評論』88、査読有、2015、132-146

佐藤勝明、「『伊勢新百韻』分析（上）」、『和洋女子大学紀要』55、査読有、2015、199-210

佐藤勝明、「『猿蓑』秋発句考（四）名月後の展開」、『和洋国文研究』50、査読無、2015、19-26

伊藤善隆、「俳諧資料の特性」、『調査研究報告（国文学研究資料館）』35 査読無、2015、27-38

佐藤勝明・小林孔、「『続猿蓑』「猿蓑に」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』87、2014、46-58

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明、「宝永正徳俳人大観（三）」、『近世文芸研究と評論』87、査読有、2014、118-141

佐藤勝明・玉城司・伊藤善隆・服部直子・越後敬子・稲葉有祐、「『白陀羅尼』「枯たはと」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』86、査読有、2014、35-46

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明、「宝永正徳俳人大観（二）」、『近世文芸研究と評論』86、査読有、2014、139-162

佐藤勝明、「「かるみ」継承の一態 『別座舗』『続別座敷』の分析から」、『和洋女子大学紀要』54、査読有、2014、149-160

佐藤勝明、「『猿蓑』秋発句考（三）名月後の展開」、『和洋国文研究』49、査読無、2016、1-10

佐藤勝明、「翻刻・『詠諧畧題林』（下）」、『近世文芸研究と評論』84、査読有、2013、104-115

佐藤勝明・小林孔、「『続猿蓑』「いさみ立」歌仙分析」、『近世文芸研究と評論』85、2013、65-80

伊藤善隆・金子俊之・佐藤勝明、「宝永正徳俳人大観（一）」、『近世文芸研究と評論』85、査読有、2013、185-209

〔学会発表〕（計5件）

佐藤勝明、「『おくのほそ道』の白河前後」、『全国大学国語国文学会大会』、2015

佐藤勝明、「『猿蓑』と『奥の細道』」、『俳文学会東京研究例会』、2015

玉城司、「新出芭蕉真蹟資料三点 - 主として真蹟懐紙をめくって - 」、『俳文学会全国大会』、2015

伊藤善隆、「俳諧資料の特性」、『国文学文献調査員会議』、2014

玉城司、「白雄時代の芭蕉受容」、『真田俳諧研究会』、2014

〔図書〕（計4件）

佐藤勝明、芭蕉翁顕彰会、『俳諧の歴史と芭蕉』、2015、172

佐藤勝明、吉川弘文館、『芭蕉と奥の細道』、2014、159

玉城司、NHK出版、『蕪村の四季 交響

する魂』、2014、157

玉城司、角川学芸出版、『一茶句集』、2013、618

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 勝明 (SATO Katsuaki)

和洋女子大学・人文社会科学系・教授

研究者番号：60255172

(2) 研究分担者

玉城 司 (TAMAKI Tsukasa)

清泉女学院大学・人間学部・客員教授

研究者番号：20410441

伊藤 善隆 (ITOH Yoshitaka)

湘北短期大学・ビジネス総合学科・教授

研究者番号：30287940